

第1期第3回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時：平成25年7月8日（月）午後1時30分から

会 場：新潟市美術館

出席者：

（委員）会長	宮田 亮平	東京藝術大学学長
副会長	中山 輝也	新潟県博物館協議会副会長
	大倉 宏	美術評論家
	大島 煦美子	財団法人 新潟県女性財団理事長
	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部学部長
	野川 彰夫	新潟市立江南小学校校長
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸係長
	武田 勝治	公募委員
	中村 文香	公募委員

（事務局）

	鈴木 浩行	文化観光・スポーツ部 文化政策課長
新潟市美術館	塩田 純一	新潟市美術館 館長
	井関 一博	同 副館長
	松沢 寿重	同 学芸係長
	大谷 道佳	同 総務係長
	山田 洋美	同 主査
	山岸 亜友美	同 学芸員
新潟市新津美術館	横山 秀樹	新潟市新津美術館 館長
	高橋 努	同 副館長
	大森 慎子	同 主査（学芸員）
	小林 一吉	同 主査（学芸員）
	小熊 千佳子	同 主査

次第：

1 開会挨拶 新潟市美術館長 塩田 純一
新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 会長 宮田 亮平

2 出席者紹介

- (1) 委員紹介
- (2) 事務局紹介

3 報告

- (1) 部会での検討結果 について
新潟市美術館及び新潟市新津美術館の収集方針（案）について
- (2) 新潟市美術館 30 周年大規模改修事業について

4 議事

平成 24 年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業報告について

5 閉会挨拶

新潟市新津美術館長 横山 秀樹

1 開会挨拶

(塩田館長あいさつ)

新潟市美術館、新潟市新津美術館の合同の協議会が 2 年目を迎える。本日は、報告事項 2 件の後、昨年度の事業報告についてご議論いただく。両館ともそれぞれの課題について真摯に取り組んでまいり、一定の成果が出たものもある。忌憚のないご意見をお願いしたい。

(宮田会長あいさつ)

前回の協議会で、改めて新津美術館のおもしろさを感じたと同時に、この新潟市美術館そのものがきちんとした発信をしていかないと、両者の連携が取れないのではないかと感じた。市がどういう文化行政をしているかをしっかり受け止められる環境づくりや、まちの人たちとどのくらい接点を持てるかが大きな問題となる。新潟市美術館の改修計画が、一つの大きなきっかけとなればよい。

私が運営委員をしている東京都美術館のリニューアルは、スタートがフェルメールの展覧会だったが、メディアやボランティアとの連携も非常にうまくいき、都の美術館が新しくなったことがしっかり受け止められた。大学教員や学生の有志で「とびラー」という愛称のボランティアを作り、うまく連携が取れた。上野駅、上野のまちそのものと「あいうえの」というものを作り連携していく。新潟市美術館も改修を機に、新しい、素晴らしい美術館となってもらいたい。

2 出席者紹介

事務局より、委員を紹介。事務局の出席者を紹介。

3 報告

(1) 新潟市美術館及び新潟市新津美術館の収集方針（案） について

(金山委員より報告)

新潟市美術館と新津美術館の資料収集方針については昨年度の協議会で話題になり、その後、6月10日に新潟市美術館で、部会メンバーと、美術館側とで検討した。

検討の結果、新潟市美術館については、1つ目は「新潟の昨日・今日・明日」として新潟市及び新潟県内の作品、2番目は「19世紀～20世紀の美術」として国内外のもの、3番目は「21世紀の美術」として国内中心のものとし、これまでの収集方針を踏襲し大きな変更はない。

対して新津美術館は二つの収集方針を設け、1つが「現代のマスカルチャー（日常生活に即した美術）」ということで、この内容についてはあとでご意見をいただきたい。2番目は「新潟地域ゆかりの美術」で、新潟市内を中心にした美術とする。

もう一点、資料収集について、購入予算が一般会計で2,000万円ついており、購入にあたっては美術資料選定委員会と価額評価委員会にかけるが、資料購入の際は購入物件の候補が出たところで部会のほうに報告をもらうということになった。部会はそれに対して権限はないが、コメントを出していくことにした。

大倉委員から資料収集方針について補足を。

(大倉委員)

新津美術館が本格的に収集方針を立てて収集していくので、同じ市内の二つの美術館それぞれに個性や特色を出したほうが良いと意見を申し上げたが、一方で、方針を限定しすぎると束縛にもなりかねないので、大枠な収集方針が望ましいとの意見もあった。

両館で重なる「新潟の美術」をどう考えるかという点についても話し合った。新潟市美術館のほうは、新潟市及び新潟県ということで、広がりを持った範囲で新潟を考えていて、どちらかというと遠心的という話があった。一方新津美術館は、収集及び展覧会ももう少し求心的で、地域、新潟市に根ざした目で、同じ新潟でもそれぞれの個性を出していきたいという説明があり、私も大枠で賛成した。また、新潟出身で他で活躍している作家、他の出身だが新潟で活躍発表している作家、または新潟のコレクターが収集した作品とか、いろいろな幅を持たせる意味で、地域ゆかりのという言葉に落ち着いた。

現代のマスカルチャーについてもかなり幅の広い言葉であり、日常生活に即した美術ということで、少し幅を持った収集が可能だろうということで、ここに落ち着いた。

(中山委員)

両館の特性や個性を活かした美術館づくりは賛成だが、収集方針に示されて、具体的にはどのようなものか、特に「現代のマスカルチャー（日常生活に即した美術）」というのは分かりにくいのではないか。

（金山委員）

美術館側からの再提案を踏まえたものなので、美術館側からお答えいただきたい。

（高橋副館長）

新津美術館の特色、個性といったものから説明したい。旧新津市に設置され、新潟市と合併後は、新潟市の一翼を担う美術館であるとともに地域にも目を向けた活動を行っている。また、子どもを始め、美術にあまりなじみのない方も親しみを持って美術に出会える場を提供しているという特色を踏まえて、現代のマスカルチャー、そして新潟地域ゆかりの美術とした。マスカルチャーとは一般大衆が広く愛好する文化という意味がある。具体的には、絵画や彫刻に対して、版画、写真、挿絵、日本画、洋画、書、工芸、デザイン、絵本、アニメ・マンガといったものを包括する形でマスカルチャーとした。

新潟地域ゆかりの美術ということでは、地域の美術を幅広く扱うということで、新潟出身の作家、新潟で活動した、あるいは活動している作家、新潟に滞在したことのある作家、新潟を描いたり題材にした作品、新潟で収集された作品など、新潟におけるアートシーンに関わる美術作品、関連作品ということで考えている。

（中山委員）

マスカルチャーという言葉はあまり聞かない。それから括弧書きがなお分かりにくいので、例えばこれはこうだという具体的なものがあつたほうがわかりやすいのではないか。

（大島委員）

この「マス」の意味は、マスメディアのマスと同じ、全体を意味するマスか。

（高橋副館長）

そうです。

（大島委員）

では、カルチャーに関してなら何でもかんでもいい、ということではないですか。

（中山委員）

その中でこういうものを想定している、ということ言ってもらえるとありがたい。

（宮田会長）

何でもかんでも全部ということではなく、その中で、今回は非常に身近な美術の中でこういうことをしていきたい、というようなことをうたった方がよいということですね。

（降旗委員）

新潟市美術館については、以前の収集方針を踏まえた形できちんとされていると思う。新潟市新津美術館のほうはこれから新しく形成していくと思うが、今のマスカルチャー（日常生活に即した美術）というのはほとんどのものが入るという。ただ、それだけでなく、今新津美術館で開催されているような、サブカルチャー的なものもかなり含まれることになるか、また、展覧会の企画との関連も反映されて出てきたものかと思ったが、いかがか。

（高橋副館長）

館の企画展の方向性も含んだ形のもののご理解いただきたい。

（降旗委員）

それらも積極的に取り上げていきたいということだと思うが、そういったものは、収集の点で物量もけっこう多くなってくると思うが。

（宮田会長）

心配なのは、何でもかんでもいいのかということ。最近全国の美術館で寄贈作品が非常に多くなってきている現状がある。お亡くなりになって全部を市の美術館に寄贈したいとなったときに、線を引くのがとても難しい。広く収集するという意味では問題はないが、今度はそこでどういうフィルターをかけるかを慎重にやってほしい。

（井関副館長）

降旗委員の発言のように、今までの新津美術館の活動からサブカルチャーというイメージも定着しつつある。この原案を作るにあたって、どういう表記がいいか相当悩んだ。いい言葉がなかなか見つからなかった。最終的には、いろいろ幅広くというところはそのとおりだが、例えば、昨年度、ブラチスラヴァの絵本原画の寄贈を新津美術館で受けたが、ああいうものも今までも積極的に取り組んでいるので、そのようなものも受け入れられるようにしたい。そういう中で、非常にわかりにくいという点をご指摘のとおりだが、この表記に落ち着いたということでご理解いただきたい。

（中山委員）

もう一つは、新潟市美術館の「新潟の昨日・今日・明日」と新津の「新潟地域ゆかりの美術」と、あまり区別ができないように思う。表現はこれでいいと思うが。例えば、具体的に、こういうものであれば新津で、これなら新潟市というようなものがないものか。

（金山委員）

新津の場合には笹岡一コレクションが入っている。新津を中心にした美術ということが含まれているが、場合によっては新津以外の新潟市内の地域も入るということもある。それに対して新潟市美術館の「新潟の昨日・今日・明日」は、これまでに新潟市内の作家、プラス県内の作家の作品もコレクションに入っている、それを活かしたほうがいいという

ことである。新津のほうは新潟地域ゆかりの美術という名称を考えたのだが、形での分けという意味でいうと厳密な分けはできないが、緩やかな分けをして、両館の方針の差を出している。

(宮田会長)

市町村合併によって同じ傘の下になったが、基本は全く違う生い立ちを持つ館である。私の印象では、新津のほうは、新潟市美術館とは違った意味で、花があり、まちがあり、鉄道があり、そして現代の新しい方式を取り入れようとしていたという個性がある。新潟市美術館は、重厚感のある、新潟市のいわゆる港町の、というように見ていたが、それをうまく線引きして分けようとしても、今のご意見のように分けきれないものもあるので、これから徐々にそういう意識もつけていきたいということかと思う。

(金山委員)

「現代のマスカルチャー」について、部会と美術館側とで協議して、美術館側からの提案を活かした形で取り入れたのだが、少し分かりにくいので括弧書きで日常生活に即した美術と入れた。部会でのそこまでの調整を踏まえて、この協議会の場で意見を聞いたほうがいいということもあり、会長のほうからも、ぜひこれについてご意見を伺いたい。

(宮田会長)

括弧書きはいらないように思う。購入するものに関しては収集委員会とかのフィルターがきちんとあるので、それを大切にするということで。あまりいろいろなことを書きすぎると、かえって束縛されるという気持ちもある。

(降旗委員)

私もこの括弧書きはなくてもよいと思う。新潟市美術館の以前の収集方針も日本と西洋の近代美術と現代美術の動向、そして新潟の昨日・今日・明日ということがあって、それがこういう形で新たにきちんと位置づけられ、新潟市美術館も 30 年弱かけてすばらしいコレクションを築いてきた。新津美術館が向けている視点は日本の美術館の中でも非常にユニークでとても評価できる。それをこれから長年かけて作っていくと、非常にいいコレクションになると思う。

(宮田会長)

それでは、新津のほうは「現代のマスカルチャー」で括弧書きはなし。新潟市美術館の欄にも 2 つ括弧があるが、「21 世紀の美術」は国内中心でいくということなら、「19 世紀から 20 世紀の美術」の方は、国内も国外も書かなくていいのではないか。

(塩田館長)

新潟市美術館に関して、今まで 19 世紀から 20 世紀ということでは国内も海外も含めてい

て、括弧書きがなくても実態は変わらないので、括弧書きをなくしてよいと思う。

(高橋副館長)

新津美術館のほうも、括弧書きをなくす形でよいと思う。

(2) 新潟市美術館30周年大規模改修事業について

資料2に沿って事務局より説明。

新潟市美術館は昭和60年10月13日に開館したが、オーバーホールが必要になってきたため改修工事を計画している。平成22年度に前川建築設計事務所が行った老朽度調査の結果に基づく整備が必要な箇所の工事と、美術館機能の強化・充実を図るために必要な改修を考えている。今年度は設計を行い、来年度工事を行う計画である。

(大倉委員)

常設展示室について、いつも閉鎖的で変化がなく、広いのにあまり広く感じない。何か工夫できないか。企画展示室は中に移動壁があって、歩くことで視界が変化してそれが広さの感覚になるのだが、常設展示室は入ったときから全部見えてしまい、動き回る楽しさがない。天井が非常に高いので企画展示室のような移動壁は難しいと思うが、小さい作品を並べるときはもう少し高い移動壁があると変化がつけられるのではないか。改修工事を機に常設展示室をもう少し有効に使う検討をしてほしい。

(大島委員)

何か、建物ばかりではなくて、外の明るさも十分に感じられるように。

高齢社会で車イスの方も増えてくる時代だと思うので、そのときにスムーズに移動できる幅とか、段差とか、そういうものに配慮をお願いしたい。

(大倉委員)

常設展示室入口の外光が入る部分はいつもブラインドが下りている。外光が入ることで作品に問題があるためかと思うが、もう少し工夫できないだろうか。常設展示室は完全に外の眺めがないのですごく重い。少し改修するなどして、開放感をどこかでもう少し演出する工夫をすれば、もっと魅力的な展示室になるのではないかと思う。

(大島委員)

少子化で、若い親たちにいろいろな場面で喜びを感じてもらう環境づくりは大事だと思う。美術館も、親が鑑賞している間は子どもを預かるという、すべての展示にそれをしてくれという意味ではないが、若い人たちも興味があるような展覧会には託児ルームに変更できるような、多目的に使える部屋は必要だと思う。新津美術館にはベビーカーが備えてありとても

良いと思った。これからの時代、重厚さプラスオープンというような設備を整えて、それを発信し、うたい文句にするといい。

(宮田会長)

とても良いアイデア。毎日は無理なので、例えば曜日を決めて託児をすると、一気に若い方が来られる。

(中山委員)

今の話は、ぜひ新津美術館のまねをしていただきたい。

そして、他の美術館情報を検索するコーナー。考えていると思うが、記載がないのでお願いしたい。

(井関副館長)

検討する中で、情報コーナーとして、例えばコンピュータを置くようなことも考えたが、今、日進月歩で、スマートフォンなどで特定のところに行くと情報が出てくるようなシステムもある。確かに大事なことなので、何らかの形でそういう情報を落とせるようなものを今検討している。

(宮田会長)

エントランスの辺りに、簡単で、最新で、かつ利便性の高いものがあると良い。調べてから来ているということもあるが、やはり館に来たときに、次のところへ行ってみようという気になる。新潟市の情報で、美術館以外のイベントなども入って、互いに共有できるといい。

(金山委員)

図面を見ると、ここはこうしたらいいというアイデアがいろいろ浮かぶ。これは大事なテーマなので、部会の委員で、実際に現地を歩いて意見を出し合い、美術館側とも協議をしながら、検討してみてはどうか。

(井関副館長)

スケジュールの説明が抜けていたが、実は、今年度の予算で前川建築事務所に設計を委託しており、遅くとも秋口には次年度の工事費予算を要求する。実際に事業費を出すに当たっては、その前段で、8月上旬には文化庁との協議がある。

(金山委員)

その辺のスケジュールも踏まえ、一回部会をやりたいと思うが、日程的に可能か。

(塩田館長)

難しいと思う。今日の資料にはないが、実は今いただいたような意見は計画に反映させて

いる。1階の図書室を変えて多目的な機能を持たせるが、そこを、日によってはキッズルームのような形で活用したり、講堂も非常に重苦しいので、リノリウムの床にし白系統のカラーコーディネートにして、講演会だけでなく作家の公開制作やワークショップなどにも活用を考えている。詳細については、また改めてお示ししたい。

(金山委員)

館内に入っても喫茶室があるのが分かりにくい。海の庭などの屋外も使って喫茶コーナーが設置できると開放的になるのではないか。

今の図書室はほとんど使われていない。ここの館はボランティアの存在が見えない。将来的にボランティアを養成して連携してやっていくとなると、その人たちの居場所が必要になってくる。今の図書室のあたりをそういう場所に位置づけるのはいかがか。ちょうど事務室とも近いし。

託児については、川崎市民ミュージアムの取組なども参考にしながら、託児スペースを考えるとよい。ハードと同時にソフトをどうリニューアルしていくのかを踏まえて、それをハードに反映させていく考え方も必要だと思う。

(宮田会長)

リニューアルは新築とは違い、また予算の問題等あると思う。ここはこうしたほうがよいという意見を2週間を期限にメールで送ってもらい、皆の見える化の中で、できることとできないことを共有することで、お願いしたい。

4 議事

(1) 平成24年度 新潟市美術館及び新潟市新津美術館事業報告について

新潟市美術館について資料4～5に沿って事務局より説明。

(金山委員)

学芸員の増員の報告があったが、どうして増員されたのか。

(井関副館長)

昨年10月から文化庁に1人研修派遣することになり、今の勤務態勢を見直しする中で、一定期間の欠員が出ることと、そもそも体制的に弱いということで、人事当局に2名の増員を要求しそれが認められた。辞退者が出た関係で2回に分けて採用する形になった。

(金山委員)

文化庁へ行った方が戻ってきたら、増員した2名分もそのままか。

(井関副館長)

美術館としては、そうしたいと考えている。

(金山委員)

正規職員か。

(井関副館長)

正規職員。

(中山委員)

内容についてはこれでよいが、二つほどお願いがある。以前にも、新潟の公立の美術館、博物館と、連携というよりも、ある程度指導したり、いろいろなことをやるべきではないかという提案をした。もう一つ、スタンプラリーについて。平成9年か平成10年に磐越高速道が開通したときに、いわきから新潟まで連携してスタンプラリーをやった。当時の斉藤館長が小さい館まで声をかけて入れて、10か所くらい回ると記念品をもらうなどしたことがある。そういう横の連携のほうがむしろ良いのではないか。この提案を二つさせていただきたい。

新津美術館について資料6～7に沿って事務局より説明

(大倉委員)

新津美術館は横山館長になってから、大分、方針や展覧会の内容なども変わったと感じている。ウルトラマン、手塚治虫、今回の仮面ライダーでもたくさんの人に来てもらえる企画を増やしたことや、地元の秋葉区の名品展など、足もとに目を向ける企画がかなり増え、それが入館者増につながっているし、非常にいいことと思う。ただ、以前の新津市美術館が打ち出していた斬新な現代アートの展覧会なども、決して多くの人には行かなかったが、私を含め、非常に開放感を感じた市民もいた。だから、これまで培ってきた方向性を引き継いだ企画も欲しい。人が集まる展覧会だけがいい展覧会ではない。「解る」「いい」と思う人は少ないかもしれないが、こういった展覧会をやってくれてよかったという開放感や刺激を受けられるような展覧会も、新津美術館にはやってほしいと個人的に思う。また、非常にユニークな建物なので、その建物を活用するような企画も今後さらに考えていくと、より深い個性が生まれてくるのではないか。

(降旗委員)

両館それぞれ目標を掲げ、それをきちんと遂行していると感じた。展覧会も非常に工夫があり、私自身は学ぶところがある。

教育普及について伺いたい。教育のほうにももう少しテーマというのが見えてきてもいいように思う。先ほど、リニューアル後に現代作家の公開制作などもやっていきたいと塩田館長から話があったが、何かもう一つ突き抜けるような、教育に関する方針みたいなものも見えてくると、よりいい。

(宮田会長)

先週末に広島県の爆心地のそばの小学校でワークショップをやった。その校長先生が、初めは美術の先生がいないからと断ろうとしたが、ワークショップの日の夕方には、先生も教育委員もみんな芸術家になった。いったん家に帰した子どもたちがまた来て掃除をしたと聞いたが、まさしく芸術の力だと思った。

展覧会の1週間前くらいにプレ何とかという感じで小学生などと一緒にやったらどうか。ただ展覧会をやるのではなく、前振りでどれだけやるかが大きい。校長はそうだねとはすぐ言わないだろうが、こういうことならできるということを提案して逆発信できたら、より保護者と連携が取れると思う。

(大島委員)

本当にそのとおり。柔軟な発想に子供たちをどう巻き込むかということは大事なことと思う。

(野川委員)

小学校の先生も、図工の授業はやっているが、少し専門的に継続して研究なり携わってこない、私は図工が苦手ですと言う方はたくさんいる。しかし新潟市の小学校では必ず図工主任がいる。113校あるうち半分弱くらいは、少し勉強した方が図工主任になっていて、あとは関係ない方がやっているの、そういう方の学校をターゲットにする。美術の先生がいないからと最初は校長や職員が言うだろうが、小学校の先生方は中学校の教員より遙かに柔軟なので、中に入ってしまうと、多分望ましい動きや反応があると思う。

(大島委員)

ボランティアをお願いしているとあったが、それは有料ボランティアか。

(横山館長)

無料で、交通費も出ないが、ボランティアは公募している。今は読み聞かせの育成をしており、指導者を呼んで何回か読み聞かせの研修会で覚えていただいている。

(大島委員)

この前の会議で、ホームページがなかなかうまくリンクしないという件は、解決された

か。

(中村委員)

それは時間がたつのを待つしかない。新潟市のホームページ本体が変わったので、新しいものはリンクがついているが、入れ替え前のものはヒットしない。

(横山館長)

以前は新潟市のホームページとは別に新津美術館のホームページを持っていたが、新潟市がホームページをリニューアルしたとき、その中に新津美術館が入ったので、市のホームページ内でそこにたどり着くまでが大変になった。今はアクセスが多くなってきたので、新津美術館と検索すると入れるようになってきた。その点は何度も広報課に言っているがなかなか大変である。

(大島委員)

新潟市美術館のホームページで、館長のノートを楽しみに読んでいる。すごくよい。市民側に向けての発信で、ホームページの力というのは侮れないものがある。

5 閉会挨拶

(横山館長)

新津美術館の収集方針や新潟市美術館の大規模改修工事、事業のあり方など、美術館の今後を考えていくうえで貴重なご意見をいただき、大変有意義な会だった。今日の内容、ご意見について両館ともこれからの運営に十分反映させ、よりよい美術館になるよう努力したい。